

沈黙に向き合う

沖戦戦聞き取り47年

(105)

石原 昌家

連載第93回(2021年11月5日)から歴史修正主義の台頭シリーズを第99回(2022年3月3日)まで続けたところ、ロシアのウクライナ侵攻(世界連邦運動では「武力衝突」)が開始された。沖戦戦の悪夢が現実によみがえった思いに駆られた。そこで急遽、沖戦戦体験が導く世界のあるべき姿を構築していったら、世界連邦運動に行き着き、資料で確認できる機会が与えられた。それが無敵世界シリーズとして展開する。フィニッシュラインとして歩むべき道を示唆する本稿のテーマにする。

歴史修正主義の台頭に対峙して、それを正す原考者行動について、資料に基づきながらその根源的部分を解き明かし、長期連載を再開して行きます。2017年9月7日からスタートしたこの連載を終了するにあたり、私が出たい

常識破壊の社会ともいわれるように、分析視点は常軌を徹底的に疑うことである。例えば自殺(近年は自死)という場合、命を絶つが、あいつが僕を分たてたという社会的背景を死とて社会の諸問題にたいして、それはさまざま

歴史修正主義を正す①

「援護法社会」の沖繩

赤子も「集団自決」(殉国死)

石原昌家先生



歴史修正主義の台頭に対峙して、それを正す原考者行動について、資料に基づきながらその根源的部分を解き明かし、長期連載を再開して行きます。2017年9月7日からスタートしたこの連載を終了するにあたり、私が出たい

でみた。それ程の無念の思いで「命を絶たされた」か、その文字が私に脳裏に刺さっている。社会主義は社会的諸問題を解決する手段として、自決という道因を突き止めた。本連載でも社会的分析を貫くことに努めてきた。諸問題を解決して

二つの裁判

連載最後のシリーズは二つの面構で沖戦戦裁判(大江・岩波沖戦戦裁判)沖戦戦国神社会記取消裁判でしめくられた。い

り通っている。〇寛慰語を用いている。「集団自決」(殉国死)したと申請しなければ、受理されなかった。連年金受給者に配慮した表現にして恩恵を。それについて、大江三郎ノベル文学賞作家が14年前、私宛のハガキでも嘆いてい

大江氏の嘆き

「重要な一論文をいまだに、判決の日の東京一大会に提出された。記者会見の発言の前半を、集団自決」の定義についてあてましたが、本土の新聞でも奇妙なことが沖戦の常識になっただけで、それを脱した知識人へ、な

沖戦戦体験を日没精神的に発信している沖戦の「新新聞」のテーマが「集団自決」(殉国死)という奇妙な表現で、政府が住民を戦闘参加者として軍人扱いをするまで、赤子まで「集団自決」(殉国死)したと。連

大江健三郎からのハガキ